

研究授業「保育学研究法」の実施

田 中 崇 教*

Enforcement and reflection of an open class “Methods and Skills in Reseach on Early childhood care and education”

Takanori Tanaka

(Abstract)

The purpose of this paper is to explain a lessen research “*Methods and Skills in Research on Early childhood care and education*” for the second time on the fiscal year 2015 in the Department of Early Children Care and Education of Takamatsu Junior College. Feature of this lecture is to contain methods of active learning. Advices for improvement were suggested by members of the Department.

Keywords : open-class, lessen research, active learning.

はじめに

本稿は、保育学科FD活動の事業として2007（平成15）年度以降毎年2回（前期と後期に各1回）計画・実施されている研究授業・授業検討会の2014（平成26）年度後期報告である。

1. 実施日程

(1) 研究授業

日 時：2014年10月16日（木）1 校時

場 所：本学2105講義室

* 提出年月日 2015年11月30日、高松短期大学保育学科准教授

受講生：保育学科1年次生（保育学科卒業必修科目）

授業者：田中崇教

加えて、次の日程で実施した授業を研究授業に準ずる公開授業と位置づけ、主として保育学科専任教員に参観を依頼し実施した。

①保育学研究法中間報告会（16グループを2分割し、2日間に分け実施）

実施日時および場所：2014年11月25日（火）3校時、本学2101講義室。2014年11月27日（木）1校時、本学2105講義室。

②保育学研究法成果報告会（最終発表）

実施日時および場所：2015年1月15日（木）3校時および4校時、本学多目的ホール¹。

（2）授業検討会

日 時：2015年2月12日（木）5校時²

場 所：本学2410電子ピアノ教室3

2. 保育学研究法の基本的性格

2-1 カリキュラムにおける保育学研究法の位置づけ

「保育学研究法（以下、本科目）」は、現行の本学保育学科カリキュラムにおいて「実践的指導力の総合的涵養」群に位置づけられる³。保育学科での2年間の学びを総括する科目「卒業研究（2年次通年）」に取り組む（課題設定、資料収集および分析、文章作成、研究発表および質疑応答等）にあたり、基礎的スキルの習得は欠かすことができない。そのため、学生が「保育問題に関心を向けること」、「卒業研究に取り組む際の基礎的スキルを涵養すること」をねらい、保育学科は本学独自開講科目（卒業必修）として1年次に設

¹ 保育学科では、平成23年度から卒業研究発表会（当日1校時および2校時実施）に参加後、保育学研究法成果報告会（当日3校時および4校時）に臨む

² 通常、授業検討会は研究授業（授業参観）当日に開催されるが、平成26年度後期の研究授業を本科目に設定した際、研究授業、公開授業（保育学研究法成果報告会等）後に改めて実施することとした。

³ 例えば、田中崇教、柴田玲子、井上範子、池内裕二、出木浦孝、中村多見、山本幾代、田中弓子、山田純子『「カリキュラムの考え方と特色」改訂をテーマとした保育学科ファカルティ・ディベロップメント活動の実施報告—保育者養成カリキュラムの構造化と教育責任の明確化に向けた新たな試み』『研究紀要』第58-59号高松大学・高松短期大学2013年183-197頁、参照。

定した⁴。

2014年度の本学シラバスにおいて次のように本科目の特徴を紹介した。

本科目は卒業必修科目に位置づけられます。保育や子育てをめぐる様々な問題に関心を向け、関連する資料を収集・解読することによって、問題の核心に迫っていく研究能力の基礎を培います。身につけた能力を2年次からの卒業研究でさらに磨いていくための真摯な取り組みが求められます。

また、15回の授業は次のように計画した。

- 第1回 授業の進め方と評価等について+理論と実践の接点を拓くアクティブ・ラーニングの意義
- 第2回 保育・教育をめぐる現代的課題を理解する
- 第3回 子育てをめぐる現代的課題を理解する
- 第4回 研究レポートの作成方法を理解する *研究授業
- 第5回 研究テーマを設定する
- 第6回 研究テーマに関連する資料を精読しまとめる
- 第7回 研究レポートを作成する
- 第8回 研究レポートを発表する+発表マナーを習得する
- 第9回 研究レポートを省察し、改善への課題を明確にする
- 第10回 改善課題への課題に基づき研究レポートを推敲する
- 第11回 推敲したレポートをさらに省察する
- 第12回 研究レポートを完成させる
- 第13回 研究レポートを発表し、質疑応答を行う
- 第14回 卒業研究のテーマを構想する
- 第15回 まとめ

⁴ 例えば、松原勝敏「短期大学における保育者養成カリキュラムに関する一考察—高松短期大学児童教育学科の幼児教育学科への改組転換」『高松大学紀要』第29号高松大学・高松短期大学1998年25-49頁などを参照。

2-2 授業計画・運営上の特徴

15回の授業計画は、次の4つのテーマで構成される。①「保育問題に関心を向ける」、②「研究（報告書・論文等作成）を進めるにあたっての基礎的スキルを身につける」、③「グループ研究作業（共同研究メンバー内での議論を含む）に取り組む」、④「研究発表・質疑応答（中間・最終）および省察を行う」である。

その際、①から③までのテーマについてそれぞれが各回で単独に開講されるということはない。授業の進度や学生の授業理解に鑑み、それぞれを関連させつつ、その都度授業を構成する。例えば、開講当初は「保育問題に関心を向け」つつ、「研究（報告書・論文等作成）に関する基礎的スキルを身につける」ことを授業活動上の目的とする。ある保育問題（保育や子育てをめぐる近年問題とみなされている事象）を取り上げ、背景等を解説する際、より深く核心へと迫るために「参考として用いることが望ましい文献資料の性質とその理由」、「文献資料の入手方法」、「文献資料の読み方」等も併せて解説の内容に盛り込む。加えて、関連するスキルの向上を目ざす演習も実施する。すなわち、ある保育問題を理解し問題の核心に迫ろうとする受講生の視点から授業を構成しているのだが、そこには、受講生によって取り組むスキルアップの演習も組み入れているのである。

続く「研究報告書を具体的に執筆・推敲する」段階では、グループ研究作業を行うと同時に、執筆および執筆内容を検討する際に留意すべき事項に関して解説を行う。そして研究報告書完成に一定の目途がたち、研究発表を間近に控えた段階では、発表や質疑応答の意義およびそれらの基本的作法（マナー）といった事項についての解説を行う。いずれも、「解説」を行う時間帯と「グループ研究作業（討議、作成）」を行う時間帯を区別したり、適宜スキルアップ演習を入れたりすると各々の学習活動が間延びしない時間配分で計画している。

「研究報告書を具体的に執筆・推敲する」段階では、授業時の中心活動として授業時間以外の時間を利用して個々に作成した報告書を持ち寄り、グループ単位で確認・推敲を行う。そのため、本段階では「授業時間外を用いて報告書を作成し、授業開始時には教員に報告書（別刷）を提出しておくこと」が授業出席の条件としている。すなわち、作成した報告書について議論し、あるいは教員からのアドバイスを受け、改善の方途を明確にすることが授業上の目的にある。

こうした自グループが作成した報告書を顧みる際、授業担当教員から提示された研究上および執筆上の基準「執筆要領」を参照させ、ルーブリック・シートを用いた自己評価及

び省察を行う。例えば、「文章の読みやすさ」や「参考資料としての妥当性」の評価は、担当本人も含めたグループ構成員の主観に委ねられる部分が多い。そこで、研究報告書を最終提出する前に、報告書中間提出の際や、中間提出と最終提出の間に適宜、授業担当教員への提出を課す。その都度、授業担当教員は研究報告書に関する概ねの改善方向性を示す。毎年、この時期から授業時間外に受講学生の来訪（質問）が増えていくことも付記しておく。

最後に、「研究発表・質疑応答（最終）および省察を行う」段階期は、毎年1月中旬に、保育学科「保育学研究法成果報告会」の開催を通して実施される。本報告会は2年次生が臨む「卒業研究発表会（審査会）」後に組み入れられており、保育学科専任教員、保育学科非常勤講師（高松大学発達科学部子ども発達学科専任教員等を含む）および保育学科2年次生、発達科学部子ども発達学科学生などに参加を募ると同時に、受講生の有志によって運営される。資料印刷や会場設営などの事前準備、当日の司会運営などそのほとんどの業務を受講生に委ね、授業担当教員はそのサポートに徹する体制をとる。

事前に、受講生（1年次生）は「卒業研究発表会」に出席し発表（2年次生）に対して質問を提起しており、かつ本報告会の司会運営を担う。これらを要因として、質問しやすい雰囲気が学生（受講生も含む）醸成されている。ゆえに質疑応答の際には、積極的に質問する聴講者の姿や、その質問に対して懸命に答えようとする発表受講生の姿がみられる。

そして本会実施後、本科目での学習全体を振り返る「まとめの課題」を学生たちに個別に課す。いわゆる一連の学習（「保育問題に関心を向ける」「研究作業に関する基礎的スキルを身につける」「グループ研究作業」「研究発表・質疑応答」）を経て、自身およびグループでの活動を省察するとともに、2年次の卒業研究を展望させることに主眼を置く記述式の課題である。この「まとめの課題」は、保育学科「保育・教職ポートフォリオ」に組み込まれ、以降における学生の振り返り資料になる。

3. 本時（研究授業時）の概要

本時は、当初の授業計画通り「研究レポートの作成方法を理解する」を主たるテーマとした。まず、導入部分では「保育問題に関心を向け」るためにこれまで取り上げてきた事例のいくつかを再度提示し、それぞれに多様かつ複雑な（矛盾を孕む）問題が指摘されていることを確認した。また、そうした指摘は専門機関や専門家によって調査・分析された

研究成果等を根拠としている点も併せて押さえた。

続く展開部分では、これから研究報告書・論文等の作成に取り掛かるにあたって、最初の構想段階で留意すべき（受講生らに課題として求める）事項を「執筆要綱」⁵として提示し、「凡例」を用いて各事項について個別に解説した。例えば、「研究題目」を設定する際には「研究テーマに関して取り組んだ内容を端的かつ明確に示す」ことが求められる。ゆえに、「取り組んだ内容が不明瞭であることを想起させる曖昧な表現」は避けるよう注意を促した。その後「序論（はじめに：研究の目的）」、「本論」、「結論」、「引用・参考文献」といった論構成に従い、各項目で内容として求められる事項を提示した。いわゆる、二重かぎカッコ（『』）の用い方や引用の仕方など文章表現上の注意点は、前回までの授業で解説しており、本時は簡潔に述べる（確認）にとどめた。これらの指導は、次回および次回と実際に受講生らが報告書を執筆した後、ループリック・シートなどを用いた自己・グループ内での点検作業により再度進めていった。さらに本時は、参考文献を解説し、必要な情報を整理する際の方法についてもその要点を解説した。

以上の内容を一回の授業の中で解説することにより、すべての受講生が研究レポートの作成方法を十分に理解し、研究作業に取り組むことができるとは想定していない。次回以降の授業で復習として幾度となく提起することが必要になる。とりわけ「グループ研究作業」段階期でのグループ討議中や授業時間内外では、授業担当教員の時間の許す限り「個別」での指導・助言を講じた。

ここで特筆しておきたいことは、本科目が1年次に位置づいているからこそ、「個別に対応する機会（時間）」を必要な指導として（時間外に）想定している点である。本学学生の場合、グループで活動を進めていく際、「何ら問題が生じることなく順調に」報告書作成を終えることは極めてまれといえる。むしろ、何らかの原因で研究作業が進まなかったり、メンバー同士の意思疎通が図れなくなったりすることは少なくない。その影響で研

⁵ 例えば、松原勝敏「研究授業『児童学研究法』の実施」『高松大学紀要』第48号高松大学・高松短期大学2007年119-139頁、参照。なお、松原勝敏高松大学発達科学部子ども発達学科教授は保育学科に本科目を開設し、長らく担当するとともに学生指導を牽引してこられた。筆者は2011年度から授業担当を引き継いだ。授業運営等多くの点で松原教授からご支援、ご示唆を頂いてきた。教材としての「執筆要綱」や「凡例」についても同様であることを付記しておく。

加えて、保育学科では2008年度に卒業研究に関する「執筆要綱」、「指導上の申し合わせ事項」、「卒業研究レジュメ執筆要綱」が改めて編成され、現在に至る。当時、作成上の主担当を務めた筆者は、保育学研究法における指導内容との整合性を図ることにより、「保育学研究法」から「卒業研究」へのいわゆる構造化を目論んだ。

究作業が著しく滞る場合もある。そこで、授業担当教員は進捗状況が思わしくないグループの研究作業を再び円滑に進めていくために、「研究作業の現状」や「今後の方向性」に関する指導・助言を行う。補足になるが、このような授業担当教員による個別指導が受講生の学習意欲の維持に貢献しているとの指摘は、今回の授業検討会でも他教員から寄せられた。

終末部分では、前回の授業で解説した「研究報告書等における文章表現上の留意点」に関する演習課題を前回に引き続き実施し、その後本時のまとめを行った。

4. 参観教員および受講学生の意見の概要

4-1 授業検討会および授業参観記録

保育学科の授業検討会は通常研究授業の当日に実施される。だが、今回は先述の通り、様々な理由から本科目の全ての授業が終了した後に実施された。保育学科専任教員には、研究授業や中間報告会、最終の成果報告会への出席のみならず、グループ研究作業段階期の授業回にも積極的に足をお運びいただいた。

授業検討会では、「授業計画等の綿密さ」「授業時の解説内容の明瞭さ」「授業時間外の個別指導への取り組み」「本科目から卒業研究（2年次）への系統性」等に関して、肯定的評価をいただいた。授業参観記録にも同様のコメント類と併せ、成果報告会等を受講生が主導的に運営するため、授業担当教員によって様々な補助・支援がなされた点に対するねぎらいの言葉も寄せられた。授業第1回目から第15回目までの間、様々な形でアクティブ・ラーニングが組み込まれているため、授業担当教員によるサポートはその都度必然的に欠かせない。こうした授業担当教員の奮闘に対するコメントとして受け取られる。

4-2 学生による授業評価等

学生による授業評価（15回目の授業終了後に実施）や「まとめの課題」の記述を確認した際、次のような点が本科目の特徴として上がる。まず、例年のことながら本科目は最も「苦心した」授業であったとの感想が受講生から出される。他の授業科目とは異なり、受講生には授業内外で「積極的な」研究活動が求められることが、その要因として推察される。とりわけ、予め設定された水準に達するまで研究報告書の推敲・改善が毎回の出席として課せられる点は受講生にとって容易くない。例えば、グループ研究開始当初の課題（報告書草案）や中間報告会後には、グループ研究活動の進捗や研究報告書の完成に不安

を覚える学生も散見される。このように受講生たちの活動意欲を低下させず、かつ意識を持続的に高めていく授業担当教員の支援は、当然ながら毎年手探り状態で行われる。

だが、一方で研究作業をやり遂げた「充実感」を取って吐露する受講生も少なくない。本科目での研究作業を通して、資料収集や要約、文章表現等の技法に注意を払い、能力が高まったと感じたようである。さらに、大半の受講生の記述の中に、グループ研究活動に対する時折見せた自らの不十分な貢献（授業を終えて顧みれば、もっと貢献できたのではないか）を悔恨したり、思うように研究が捗らず苛立っていた己の未熟さを吐露したりしつつも、そうした葛藤を乗り越える形で研究報告書の作成に従事しえたことへの充実感・達成感が記述から確認される。

また、研究活動を媒介として授業担当教員（保育学科専任教員ら）と授業時間外でコミュニケーションを取ることができた点を挙げる学生もいた。授業時間には見せない多様な姿を受講生も教員も、互いに確認し合う機会として意義があったと推察される。

5. まとめ

保育学科「カリキュラムの考え方と特色」⁶や「保育学科カリキュラムマップ」⁷等に従えば、本科目は「卒業研究」や「保育・教職実践演習」をはじめとする2年次の総合的実践力の涵養に向けた基礎段階に位置づく。それゆえ、本科目と2年次における諸科目との有機的な連関、すなわち授業運営上の効率的効果的指導が成果として芽生えなければならない。例えば、「卒業研究」を担当する保育学科教員から「保育学研究法での学習内容」を根拠に指導を講じているとの声をかけられるとき、果たして（本科目の授業担当教員として）授業を通して十分に指導・支援できたかどうか、授業担当者としての力量不足を恥じ入り、恐縮するばかりである。とはいえ、だからこそ保育職を志す学生が「卒業研究」や「保育・教職実践演習」等で充実した成果を出すために、本科目のさらなる授業改善は授業担当者に課せられた使命として受け止めなければならない。「保育問題に関心を向けるための事例内容と提起方法」や「問題解決への深化につながる支援方法」の精査、そして受講生のメディア・リテラシーの涵養等、授業改善に向けた課題は少なくない。受講生に

⁶ 松原勝敏、西浦和樹、坪井貴子、井上範子、柴田玲子、池内裕二、田中美季「保育者養成カリキュラムの構造化に関する取り組み—教員間の授業内容の調整による構造化の実現—」『高松大学紀要』第40号 高松大学・高松短期大学2003年153-167頁、参照。

⁷ 田中崇教ほか（2013年）前掲書、参照。

よる授業評価や「まとめの課題」等の記録をも参考意見に加え、改善に取り組んでいく次第である。

最後に、本研究授業に協力いただいた受講生、授業を参観していただき貴重な意見・示唆を与えてくださった先生方、そして本科目の運営に多大なご協力・ご支援を頂いた高松大学附属図書館の職員の方々に心より感謝申し上げます。

主要参考文献（注で掲げた文献を除く）

河合塾編著『「深い学び」につながるアクティブラーニング』東信堂、2013年。

夏目達也、近田政博、中井俊樹、齋藤芳子『大学教員準備講座』玉川大学出版部、2010年。

小笠原喜康『大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書、2002年。

白井利明、高橋一郎『よくわかる卒論の書き方（第2版）』ミネルヴァ書房、2013年。

田中共子『よくわかる学びの技法（第2版）』ミネルヴァ書房、2009年。

